

東京歌会（第七十回）

平成三十年八月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階C会議室。詠草は各二首十首。出席者四名（小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

雨雲のたちまち頭上に覆いくる行く途次にして踵を返す

市川茂子

踵を返す、の齒切れよさ。行く途次にして、はずでに出ているところ。上句はいいえている。傘をもたないから、ということではないだろう。さいきんの雨の降り方もある。

真夏日の人よ 表情の険しくて魑魅魍魎も引きつれている

林 博子

真夏日の人よ、が簡潔。ことしは「危険な暑さ」というコトバが、くりかえし云われた。以降の重畳するような直接的描写がいい。魑魅魍魎は、さまざまな妖怪のことだが、語源を説明するとレンガ本になるといふ。

近よればそれだけ退いてしまふ人彼はそうなり中の子もそう

小野澤繁雄

上句、そういう人柄。遠慮深さ。彼、と中の子（作者の子か）、は場所が違うようだ。それだけは近づいた分（距離）。上句、わからないという声もある。

コンビニの店員名札に「ニヤン」とありやや小柄なり中国人らし

丸山弘子

コンビニに外国人の店員をみることがある。積極的に採用しているところもあるという。ここでは、名札を読んでいる。やや小柄なり、中国人らし、も追加的で、作者がみたところ。ここがよいと云えるところだが、ニヤン、が中国人らしくない、と。

水道をだしつ放しで歯磨きをする人ありき古き学寮

布宮慈子

古き学寮、だから、共同の洗面所とかそういうところでの経験か。昔は水を大事にしていた。古き学寮、で、そこでの人の関係に新鮮なものがあった、ということでもある。

東京歌会（第七十一回）

九月二十日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二。詠草は各二百十首。出席者四名（小野澤繁雄、林博子、市川茂子、松井淑子）。

地を舐めて荒む台風すぎし跡そしらぬような今朝の空澄む

市川茂子

跡、は地を舐めて、から地上の状態を云っているか。今朝の、としているところ、時間の経過で、ここを後（のち）としたらどうだろうか。われわれは地上の人でもある。このところの台風の風雨の猛烈さも想われた。

音の無い遠き稲妻まぎれ無く大観は雲間に竜を視ていき

林 博子

大観は横山大観。絵は「龍躍る」か。音の無い遠き稲妻、は眼前。稲妻に、大観は竜を視ていたんだ、という。視るは、注意して（気をつけて）みること。まぎれ無く、は、雲間に紛れなく、これが視ることを大観に繋いでいる。大胆で切れあじのある歌。

クリスマスローズに志摩先生を偲びをり何咲かばひとわれを思はむ

中川禮子

志摩先生は佐藤志摩。上句、これは、いくらかは共有される感情なのだろう。クリスマスローズの関わりは説明されていない。下句は、じぶんになんな花はあるだろうか、という自問。なということが含まれている。さびしい歌でもある。

おおよそはひとつなりにバス停の脇侍の位置に群れて彼岸花

小野澤繁雄

ここで彼岸花は、バス停の両脇にある。バス停も都会のなかのものではない。土手ぞいや、田の畔などに、秋のお彼岸の頃にみる花。死人花を含め別称がもつとも多い花だという。根は有毒。感じが出ている。

山形県西村山郡河北町谷地に伝はる奴行列

布宮慈子

在所の歌。まだ続いているという奴行列。谷地は、沢、低湿地に対する呼称でもある。旧谷地町は、紅花や草鞋表の生産と集散地であった、という。谷地までを、クローズアップするよりに一気に述べる。懐かしさ、愛おしさ、そういう叙述の手つきがある。

東京歌会（第七十二回）

十月十八日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二。詠草は各二百十首。出席者四名（小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子）。

沖繩の知事に決まりしデニーさんのカチャーシー踊るを眺めてゐたり

布宮慈子

注意をひいたのだ。デニーさんは玉城デニーさんで、より親近ない方。カチャーシーは琉球踊りで、コトバの意味は「かき回し」、喜びも悲しみもかき回して皆で分かちあう、という。手や腕の動きがそう。テレビで多くの人の眼を奪った。

力失せしわがたなごころ鐘切りで不ざまに開けるイタリアントマト

林 博子

たなごころ、はすなわち掌だが「手の心」の意とも辞書にはある（『新明解国語辞典』第五版）。缶切りを使う機会は減っている。イタリアントマト、ここでは輸入缶か。大ぶりなものがある。安価だという。歌はある場面のものだが、生活力にかかわっている。

朝食に作りし友は湯気の立つおでんを持ちて小走りに来る

市川茂子

湯気の立つおでんを持ちて小走りに来る、というところがリアルで、よくわかる。一、二句、朝食に作りし友、のところ、おでんなので少し議論になった。朝食におでんというのが少し変則なのだ。それでも、一人暮らしたり、と自在さをみることもできる。湯気の立つ、が眼に見えるようだし、小走りに来る、も同じようだ。

ホトトギスの花の名聞きぬその庭についやされたる時間も聞いて

小野澤繁雄

下句に、やや納得のいかない感じがあって、議論になった。たんに手をかけた、ということだろうか。ホトトギスの花が話題になったが、ここで作者は、その名を花をみてしまったということ。

敬老の日の招きとぞ老二人姉弟といふゆるゆると歩む

丸山弘子

姉弟はきょうだいと読んでいる。姉弟といふ、の説明するような句に賛否があった。いずれにしても、ゆるゆる歩む、に何か真実味がある。

（報告…小野澤繁雄）